

### 【Ⅲ】 良薬と媚薬と魔薬

あらゆる植物はこの自然界の中で、なんらかの形で動物の役に立っている。例えばイネ栽培の大敵の一つであるエノコログサやノビエといった雑草にしても、イチモンジセセリという蝶の食草になっている。『蓼食う虫も好き好き』ではないが、ハムシやゾウムシといわれる甲虫類の仲間などは、植物の種々の葉を食べて生きているし、昆虫の仲間は肉食性のトンボやカマキリなどは別にしても、草食性のものが意外と多い。一見肉食性と思われるカブトムシやクワガタムシも実は草食性なのである。さらに日本に自生するチョウチョにいたっては純然たる肉食性のものは、ゴイシジミぐらいなもので、その他は草食性のものばかりである。しかも人間のみならず、こうした小動物にとっても、食樹や食草の減少がそのまま食料難を来し、小動物や昆虫などの個体数の減少につながっているケースも少なくない。例えばギフチョウの食草はカンアオイやサイシンの仲間、この植物群は観葉植物としての価値が高かったこともあって、とりわけ武蔵野の住宅開発とも重なって、戦後著しく減少してしまった。このためにギフチョウの個体数も減少の一途をたどり、現在関東地方ではこの蝶が見られるのは、町が総力を挙げて保護に乗り出した神奈川県藤野町ぐらいになってしまった。

こうした観点からすると、まさに神様が造り給うたものは一つとして、無駄なものはない。そして人間にとっての植物は、単に食料としてのみではなく、薬であったり、衣料であったり、住まいであったり、家具であったり、楽器であったり、さまざまな形で利用されている。とりわけ薬としての役割を見ると、自然界の不思議な力と植物の持つ潜在力を、まざまざと見せつけられたような気さえする。漢方薬のリストを見ると、もしこうした植物がなかったら、人間の歴史も異なった方向に向かっていったかも知れないと思わざるを得ないのである。ここではそんな薬の働きをする植物の中から、季節とは関わりなく、今までに取り上げてこなかった薬用植物を、とりわけ人によく知られた植物を中心にいくつか取り上げて見ることにしよう。

※『本草綱目』=中国には薬草を扱った書籍は数多いが、明代の李時珍(1518~1593)によって著されたこの書物ははずば抜けている。全52巻、1,871種類もの「薬」に関する記述が見られる。中国では後漢時代に『神農本草経』が著されたが、明代にはすでに散逸し、彼は26年の歳月をかけて、同書を初め800件もの資料を収集して整理し、自らも実物を採集。61歳のときにやっと完成することができたという。



ケシの花、栽培エリアには鉄柵が設けられ、鍵がかけられていた(東京都小平市薬用植物園)。

この項に記されている植物のリスト
------------------

**【Ⅲ】 良薬と媚薬**

07-03-00-1

1) チョウセンニンジン=朝鮮人参	07-03-01-1
2) センブリ=千振	07-03-02-1
3) ゲンノショウコ=現の証拠	07-03-03-1
4) ダイオウ=大黃	07-03-04-1
5) クコ=枸杞	07-03-05-1
6) マタタビ=木天蓼	07-03-06-1
7) ウツボグサ=靱草	07-03-07-1
8) イタドリ=虎杖	07-03-08-1
9) ワレモコウ=吾亦紅	07-03-09-1
10) タバコ=煙草	07-03-10-1
11) カカオ	07-03-11-1
12) コーヒーの木=珈琲木	07-03-12-1
13) ケシ=芥子/罌粟	07-03-13-1
14) クサノオウ=草の黄/草の王	07-03-14-1

<a href="#">目次に戻る</a>
-----------------------